



### 宮城県 東松島市教育委員会

# 子供の未来と幸福のために 夢のある学校を目指して

東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県東松島市。津波により複数の学校も壊滅した。しかし教育委員会が中心となり、国や県に頼らず、子どもたちの未来のために自ら力強い一歩を踏み出しつつある。その独自の取り組みについて聞いた。



## 自然と共生する学校を作りたい



木村民男さん  
教育長

### 想定をはるかに超える 災害だった

木村教育長（以下教育長） 東日本大震災で東松島市も大きな被害を受けました。大勢の方々が亡くなり、津波によって美しい街が一瞬にしてヘド口の町になってしまいました。学校も甚大な被害を受け、14校ある小中学校のうち8校が津波による浸水

を受けました。特に野蒜小学校、浜市小学校、鳴瀬第二中学校の3校は被害は深刻で、使用不能となり、解体を余儀なくされる壊滅的な状況となっています。

小山教育次長（以下次長） もちろんこのあたりは過去に何度も大津波の被害を受けている地域なので、大学教授など災害対策の専門家に頼んで津波の高さや範囲を想定し、ハザードマップを作成。避難場所も指定し、全国一のシミュレーションも行い、大掛かりな避難訓練も実施してきました。とにかくできる限り、ありとあらゆる対策を講じたのですが、今回の地震、津波の規模は我々の想定をはるかに超えるものでした。想定外のひとりで済ませていいものではないとは思いますが、予想よりも2倍も3倍も高い津波が来ることを想定できる人



小山直美さん  
教育次長

### 子どもたちが自主的に 支援活動を開始

教育長 そんな厳しい状況でしたが、驚くべきことに震災発生後数日してから子どもたちが自主的に動き出したんです。市役所の災害対策本部に来て、全国から送られて



甚大な被害を受けた東松島市。現在も急ピッチで復旧・復興が進められている



災害対策本部には全国から届いた励ましのメッセージであふれている



きた支援物資を仕分けして運んだり、掃除をしたりしてくれました。もちろん避難所で生活をしながらですが、その中のある女の子は自分の身内が亡くなっているにも関わらず通ってきてくれていました。そんな子どもたちや先生たちの頑張り、そして被災した市民の方々の助け合いの姿を見るにつけ、すごく東北人のいいところが出たと感じました。そのような協力のおかげで復旧、復興に関しては組織として大きなトラブルも出なかったですね。

### 壊滅した学校を新たに再編

教育長 現在使用不能となっている3つの学校に通っていた子どもたちは、近隣の学

校の校舎の一部や仮設校舎で授業を受けています。その状態を一日でも早く解消すべく、国内外の多くの方々力も借りたり、市民のみなさんの意見を聞きつつ、子どもたちにとってどうするのが一番いいのかわからないと悩んでいました。その結果、学校を再編して新たに高台に学校を作ることにしました。

次長 その新しいモデルにしたいと思ったのがC.W.ニコルさんのアファンの森です。C.W.ニコルさんが代表を務めるアファンの森財団が震災で被災した子どもたちの心を癒すため、長野県のアファンの森に招待する活動をしていることを当市のアドバイザーである宮城大学の風見教授が教えてく

れました。当時温泉旅行やスポーツ観戦などは各方面から沢山の誘いをいただいていたのですが、被災地の子どもたちに一番必要なのは、アファンの森のプロジェクトのような自然の力によるケアだと思い、昨年の夏に2回参加させていただきました。

子どもたちは襲来した大津波によって死ぬか生きるか、そして肉親や知り合いが目の前で流されていくという壮絶な体験をしています。そのときに負った心の傷が命あふれる自然の中で伸び伸びと遊ぶことで癒されたようです。アファンの森に行く前は沈みがちだった子どもたちも、帰ってきたときは生き生きとし、参加した人同士がわあ〜と言いながら抱きあったり涙を



浜市小



野蒜小



鳴瀬二中

流したりしていました。その姿を見て参加して本当によかったと胸が熱くなりましたね。やっぱり子どもたちは森の中で育てたいと思いました。

### 自然と一体となって 学べる学校を

**教育長** アファンの森の「心の森プロジェクト」に参加することによって、新しい学校も森の中に作りたと思うようになりました。それ以降、具体的にどんな学校を作るかについて、C.W.ニコルさんをはじめとするアファンの森財団の方々や風見教授に協力していただきコンセプトを固めてきました。

その基本にあるのが、「子どもたちの幸福を育む夢のある学校」です。それを実現するために、「安全で教育効果の高い学校づくり」、「感性豊かな子どもを育てる学校づくり」、「地域に愛される学校づくり」の3本柱に沿ってそれぞれ具体的な取り組みを考え、これから実施していこうと考えて



います。この取り組みによって全国でもモデルになるような学校を作りたという夢を持っています。

**教育長** 教育は人間が人間に教える部分と、何かを介して教えた方がより効果的な

心もち、他人の気持ちをつかめる人になってもらいたい。そこでこれから作る学校は自然景観を生かした学校、自然と共生する学校をつくり、その中で子どもたちを育てたいと思っているわけです。

具体的にはこれまでのような効率だけを求めた鉄筋コンクリートの高層階の校舎ではなく、木をふんだんに使った学校。そしてむやみに森を切り開くのではなく森の中に校舎や体育館が点在し、森の中を歩くように建物間を移動するというイメージの学校を作りたと思っています。

現在の予定は最短でも5年はかかりますが、そんな環境をできるだけ早く今の子どもたちに与えてあげたい。そのためにア

## 「森の学校」で子どもたちを元気に

ことがありますよね。その介するものとして自然はすごく大きいんじゃないかと。だからもっともっと子どもたちに自然と触れ合わせて自然への畏敬の念や厳しさ、そしてやさしさを教えていかなきゃいけないと思っています。

我々は東松島市の子どもたちを国際社会に貢献し、国際社会をリードするような人間に育てたいと思っています。日本の伝統文化を身に付け、自然、故郷を大事にする

ファンの森と提携しながら、学校建設および学校ができた後の学びの部分でも、彼らの考え方やノウハウを取り入れていきたいと思っています。



撮影：菅洋介



撮影：山本彩乃



1 昨年アファンの森に招待された東松島市の子どもたち。命の森で心も癒されたようだ 2 ツリークライミングに挑戦 3 子どもの笑顔はやはり何ものにも代えがたい 撮影：山本彩乃



C.W.ニコル・アファンの森財団  
理事長 **C.W.ニコルさん**  
作家、環境保護活動家、探検家。一般財団法人C.W.ニコル・アファンの森財団理事長として被災した人々のため「アファンの森震災復興プロジェクト」を推進している



新しい森の学校を作るには住民の理解を得ることが必要不可欠。2012年3月C.W.ニコル氏は東松島市と市の教育委員会が主宰したセミナーで森のもつ力について講演。またパネリストのひとつとして、森の学校のすばらしさを集まった住民に伝えた。

### アファンの森とは

1984年、C.W.ニコル氏が森の再生活動を実践するため長野県黒姫の麓の荒れ果てた山里を購入、「アファンの森」と名付けた。森林整備、環境教育など幅広い活動を行なっている。つらい経験をしてしまった子どもたちやその家族をアファンの森へ招待し、傷ついた心を森で癒すプロジェクトも実施。「心の森プロジェクト」ではこれまでの7年間で約550人の児童養護施設や盲学校の子もたちを森へ招待。自然のもつ癒しの力で多くの人々の心を癒してきた。



一般社団法人C.W.ニコル・アファンの森財団 [www.afan.or.jp](http://www.afan.or.jp)

## 子どもたちのために残りの半分の命を捧げたい — C.W.ニコル —

### アファンの森に子どもたちが来てくれて本当によかった

去年アファンの森に来てくれた子どもの保護者からうれしいお手紙をたくさんいただきました。「今までは塞ぎこみがちだった子どもが、アファンの森から帰ってきたら、いかに楽しかったかを一所懸命、生き生きと話してくれました。その震災以前に戻ったような姿に涙が出ました」その他にも震災以降、胸につかえていた悲しみや苦しみをアファンに来てから少しずつ話せるようになったという子どもたちもたくさんいるようです。また、アファンの森は元々は荒廃した森でしたが、26年かけて今の命あふれる明る

い森にしました。そんな話をすると「今の東松島市が26年前のアファンの森なんだね。でもみんなで一所懸命頑張ればこんなすばらしい森ができる。自分たちの住む市の復興に向けて希望が持てました」と語ってくれる人もいました。私たちは子どもの心に刻まれた津波の悲しい記憶を消すことはできません。しかし、子どもたちが自分で悲しみを受け止め、元気になってもらいたい。それが目標だったので、アファンの森に来てもらって本当によかったと思っています。森には傷ついた心を癒す効果や生きる希望を与える力があるんです。私たちは東松島の子もたちに、森の中の新しい学校で自然について教えたい。そして卒

業する頃には自然と自立心が育まれ、生きる力が身に付いている。そんな学校作りのためにこれまで森を作り、森と一緒に生きてきた私たちの技術や知識を役立てていただきたいと思います。この夢の学校ができるまではまだ数年かかります。今の子どもたちは入れません。だから僕が今の東松島市の小中学校に行って授業をしたいと思っています。森の生態系やサバイバルの技術だけでなく、森の歴史と文化などいろんなことを話したい。もし許されるなら、僕の人生、あとどのくらい残っているかわからないけど残りの半分くらいは東松島市の子もたちのために捧げたいと思っています。そのくらいの覚悟はいるんです。